各地からのたより

出番を待つ御柱用材

[南信署] 平成二十二年四月に行われる諏訪大社下社の御柱祭で、御柱となる用材のモミ八本が、昨年の十一月二十一日に現地から搬出され、山出し祭の曳き出し地点となる下諏訪町大平の棚木場に並びました。巨木八本（最長二十一メートル、最大目通り周囲三・三メートル）が並んだ姿は壮観で、氏子をはじめ棚木場の近くにある名水を汲みにくる人達など多くの見学者が訪れています。

この御柱用材は、いずれも下諏訪町東俣国有林の「御柱の森」において、平成十九年五月十二日の仮見立て、平成二十年五月十一日の本見立てを経て、平成二十一年五月三日に伐採され、伐採直後に樹皮を剥き、現地で保管されていました。

棚木場で出番をまつ御柱用材

現地からの搬出作業は、地元の共同企業体により十一月七日から行われ、重機で作業道を利用しながら観音沢林道まで下ろし、一本ずつトラックに載せ県道八島高原線を経由して約五キロ離れた棚木場まで運ばれました。

十一月二十七日には、諏訪大社による棚木場安置清払いが行われ、今年四月九日から始まる山出し祭まで同所で静かに出番を待つこととなります。

初市　開催される　木曽ヒノキ良材に高値

[木曽署木材販売室] 平成二十二年の国有林土場活用委託市売の幕開けとなる初市が、一月七日に七〇名余りの入札参加者のもと盛会に開催されました。

当日の出品量は、二、三七〇立方メートル（物件数、一四一）と通常の市売より若干少なめとなりましたが、木曽谷の主要樹種である木曽ヒノキに活発な応札が見られ、立方メートル単価で一〇〇万円を超えるものもありました。

経済の冷え込みがなかなか回復せず、昨年の新設住宅着工戸数も一九六四年以来四十五年ぶりに八〇万戸を下回る状況での開催ではありましたが、高値の応札に初市らしい明るい話題も見られました。

まだまだ、厳しい状況下は変わりませんが、今後とも需要動向を見ながら迅速で的確な販売に努めて参りたいと思います。

応札の多かった木曽ヒノキ４等材（10.2m－64cm）

林野庁長官賞を大学生へ伝達

[南信署] 平成二十二年一月二十二日、信州大学において、昨年十二月に開催された国有林野事業研究発表会（国民の森林部門）」で受賞した林野庁長官賞の伝達式を行いました。

伝達式には、信州大学及び当署の関係者が出席し、竹内署長から共同発表者の信州大学農学部サークル「伊那守」代表者の高田さんと藤田さんに表彰状を伝達しました。伝達式にご臨席いただいた岡野副学部長からは「学生が学んだことを発揮できる場があることはいいこと」との応援の言葉をいただきました。

林野庁長官賞を受賞した取組は、国有林が地域や大学生にとって身近な存在とは受け止められていない状況を森林林業の重要性を普及し地域の活性化を進めていく上での課題ととらえ、地区住民と大学生と国有林の三者（郷・学・官）の交流を活発にすることを目的に、森林官がコーディネーターとなり、地区の住民を対象としたハイキングに大学生と森林官が森林ガイドとして同行するという企画の立案から実施までの経緯を発表したものです。

取組に参加した学生からは「取組を通じて多くのことを学んだが、森林官など国有林の職員と話せたこと自体も勉強になった」との感想もあり、今まで森林・林業白書でしか知らなかった国有林を身近なものと感じたようでした。

今後も三者の交流が継続かつ活性化することで、森林林業の普及に努めるとともに、人材の育成にも貢献していきたいと考えています。

受賞した（右から）南信署・井元さん、信大生の藤田さんと高田さん

『地域住民の代表の声を聴く』
～南木曽町議会国有林視察会～

[南木曽署] 平成二十一年十二月二十二日、南木曽町議会の議員九名（全議員十名）と、南木曽町から町長・副町長をはじめ関係職員五名の参加を得て国有林視察会を開催しました。

北蘭国有林では、百年生を超える木曽ヒノキ代替材を目指す二一六ヘクタールの人工林の間伐等の森林整備を進めるため平成九年にムクリ沢林道開設に着手しました。

マサ土と崩れやすい地質に加え下流一キロ未満に国道や集落が点在するなど、着工当時には地元から災害に強い林道を切望された経緯がある中、今年度、路面舗装や法面吹き付けによる改良工事を実施しました。この延長四・一キロの林道の完成に際し「災害に強い林道」の視察を計画したものです。

現地では、今後の森林整備に話がおよび、資料として準備した衛星写真等により「林道終点から先の間伐実施には更に〇・六キロの林道の延長が必要との支署の考えを提示」、議員からは「林道延長は隣接する奥地民有林の森林整備の扉を開けることにもなる」といった意見も出されました。

現地視察を終え、署会議室に席を移し来年度の事業計画等の策定方針について意見交換を行いました。中でも日本の滝百選に選ばれている「田立の滝」周辺の復旧治山工事等の進捗状況に対する関心が高いことから、二年目を迎えた工事の現況報告や今後の予定、ボランティアによる登山道整備の取組等について報告を行いました。

林道状況の説明に聞き入る参加者

意見交換の様子

田立の滝周辺は、来年度で復旧治山工事が完了する見通しで、再オープンに向けての環境整備は南木曽町をはじめ地域一体となって取り組んでいくことを確認し、盛会のうちに閉会しました。

シリーズ 現場最前線
～健康で明るい職場づくり～

[北信森林管理署　黒姫森林事務所班]

黒姫班は、長野県北部の上水内郡信濃町・飯綱町に所在する黒姫山国有林・霊仙寺山国有林の約六、八〇〇ヘクタールと、隣接する戸隠森林事務所管内の一部（戸隠山国有林・飯縄山国有林）で作業を行っています。

班員は、基幹作業職員三名と少人数ですが、班長を中心に仲が良く、何でも話し合える仲間です。

当班の作業内容は、林道の維持修繕、境界巡検、収穫調査、分収育林の明認作業、冬季の除伐Ⅱ類作業等と多岐にわたるので、毎月「緑十字の日」には、全員で先月の反省点・今月の注意点等を話し合い、「黒姫班の安全衛生重点目標」を作成し、安全に対する意識の向上を心掛けています。

現場作業に当たっては、毎朝、森林事務所で打合せを行い、天候や作業内容に応じた安全確認を行うとともに、体調も確認し、労働災害や交通事故等の未然防止に努めています。

冬季は降雪量も多く、厳寒期であり作業環境は厳しいですが、チームワークで無災害を継続し、健康で明るい職場の維持に頑張っています。

冬季の除伐Ⅱ類作業

風景紀行（ふうけいきこう）

乗鞍登山道「太郎之助みち」

58

飛騨森林管理署
（各署の景勝地等を紹介）

乗鞍登山道「太郎之助みち」

行者「常全」の功績

高山市内から眺める北アルプスの最南端に位置する乗鞍岳の広大な山裾に広がる森林帯が青屋国有林です。

青屋国有林のほぼ中央を東西に走る尾根には、池塘が点在する高層湿原「千町ヶ原」を経由し、乗鞍岳へ一本の「乗鞍青屋登山道」が開設されています。

この登山道、明治二十八年大道教の行者「常全」（往時二十二歳）が、約二〇キロの道程を独力で四十年を費やして開設したと伝えられています。道沿いには信者等の寄進により八十八箇所に二体ずつ石仏が安置され、道標を兼ね登山者の安全を見守っていました。

「太郎之助みち」として復活

常全が開設した「乗鞍青屋登山道」も手入れができなかったことからいつしか廃道状態となってしまいました。

平成十年頃から十年程かけ旧朝日村と岐阜県は、青屋口から千町ヶ原までのコースを「太郎之助みち」として復活させ、奥千町ヶ原に避難小屋も建設しコース全般の整備を行いました。

また、道しるべとなっていた石仏の見あたらない箇所もあったことから、「復活乗鞍青屋登山道八十八作戦」と銘打ち、ボランティアの協力を得て不明となっていた石仏を探し出し、当時の登山道を復活させました。

この道、登り始めは傾斜もきついコースとなりますが、サワラ・ヒメコマツ・ミズナラの天然林に覆われていることから、日射しも遮られ辛さも和らぎます。やがて最初の石仏に辿り着き大休止、石仏には寄進者の名前も刻み込まれており常全の遺徳も忍ばれます。汗も収まったところで次の石仏へ、これから先は登りも緩やかになりモミ・ダケカンバの森林帯を抜け標高二、二〇〇～二、三〇〇メートルの千町ヶ原、奥千町ヶ原へと続きます。

千町ヶ原から奥千町ヶ原にかけては間近にそびえる乗鞍岳や北アルプスの峰々、石仏そして池塘や湿原植物も迎えてくれます。青屋集落からの日帰り登山ではここまでが精一杯かと思われます。

乗鞍岳には「乗鞍スカイライン」が開通しておりますが、先人たちが開きそのなごりの残る「太郎之助みち」、体力作りと癒しを兼ねた趣ある登山道です。

◆アクセス

○公共交通機関は朝日町中心部まで、あと自家用車等の利用となります。

○高山市内からは、青屋九蔵集落まで二十四キロ（車で四十分）、九蔵集落から登山口までは林道を徒歩で三キロ（約一時間）、登山口から奥千町ヶ原避難小屋までは八キロ（約六・五時間）、奥千町ヶ原避難小屋から乗鞍岳までは四・五キロ（約三時間）

奥千町ヶ原から望む乗鞍岳

避難小屋が整備された奥千町ヶ原

登山道脇の石仏群

奥千町ケ原の池塘